

### 3. COVID-19 への対応

COVID-19 蔓延に伴い、高知県内でも全国の感染拡大に呼応するように 2020 年 3 月 1 日から陽性者が始り、一旦は終息するが 3 月 27 日から 4 月 28 日にかけては断続的に 61 名（第一波）、また 7 月 12 日からは 9 月 11 日にかけては 63 名（第二波）、その後 10 月 28 日までは 7 名と散発していた。ところが第三波となった 11 月 20 日から 2021 年 2 月 16 日までの間は 740 名と一気に感染者が増加した。

この第三波に際しては、看護学部では感染症対策を専門とする木下教授、看護学研究科の災害看護領域の学生・教職員を中心に様々な支援活動が模索された。そこで、なかなかアルバイトもできず食費を切り詰めている学部学生達に対し、有志から戴いた食材の寄付を配布する活動を開始した（『コロナサポート活動』参照）。

また 12 月 25 日には厚労省・文科省から看護系学部を有する各国公立私立大学長に対し、「新型コロナウイルス感染症対策における看護師等の免許を有する教員や大学院生の支援について（協力依頼）」が伝達されたことを受け、学部内でも支援活動の可能性を模索した。その結果、『学外サポート』として、陽性者が急増していた高知市保健所への教員の応援派遣と、宿泊療養施設の看護師駐在について大学院生に入ってもらうことにした。一般県民に対しては、巷に様々な情報があふれていることに対し、看護学部としてエビデンスに基づいた対処法や感染予防の考え方を伝える『FAQ』を大学のホームページから発信することとした。

その後 2021 年 2 月 16 日には一旦終息していた感染者は、3 月 1 日から再び散発し、3 月 1 カ月で 35 人とその後も感染者は続いている。

#### 1) FAQ プロジェクト

木下真里、山田覚、竹崎久美子、藤代知美、嶋岡暢希、竹中英利子

##### 【活動概要】

COVID-19 が世界的に拡大する中、不正確な情報によるインフォデミック、人々の正常な意思決定を妨げるほどの情報の氾濫が社会問題化する中、看護学部による社会貢献の一環として、令和 3 年 1 月に表記プロジェクトが開始された。COVID-19 に関するさまざまな疑問に対して、関連する専門知識の解説を本学ホームページに掲載するものである。

これまでに提案された 20 以上の質問候補について、重要性やタイムリネス、本プロジェクトで扱うことの妥当性など、様々な角度から検討を行った上で、メンバーによる投票によって 7 つの質問を選び、順次解説の作成を進めている。令和 3 年 2 月 1 日に最初の 3 問への解説を、本学ホームページに掲載し、その後 3 問が追加掲載された。令和 3 年 3 月 20 日現在、県民向け 5 問、医療従事者向け 1 問が掲載されている。解説は、便宜的に県民向け、医療従事者向けと分類して掲載しているが、県民向けとして掲載した質問も、医療従事者等の現場の専門職が、クライアントから同様の質問を受けた際にどのように回答するかを考える際の、参考としてもらうことを想定している。

このプロジェクトは災害・国際看護学領域の教員を中心に、精神、母性、老人、在宅各領域の教員をコアメンバーとして構成しているが、解説案の作成は、内容に応じて看護学部内の様々な専門領域の教員に応援を求め、共同で作成している。

##### 【活動成果】

また、一般の検索エンジンを使用して「新型コロナウイルスに関するよくある質問」として検索した場合、Google では約 54,200,000 件中 5 位、Yahoo! では約 54,200,000 件中第 6 位に表示されている（2021/03/20）。地方自治体または政府機関のページが上位を占める中で、大学のペ

ージとして唯一トップページに表示されている。令和3年3月20日現在、掲載内容についての苦情や誤りの指摘、疑義の照会は、当サイト管理者のもとに届いていない。「(専門的な理論の応用方法が) わかりやすかった」「参考になった」などの好意的な意見は複数件寄せられている。

3月からカウンターを設置してサイト閲覧数のモニタリングを開始している。令和3年3月現在、1日あたり10件以内の安定した閲覧数がある。

## 2) コロナサポート活動 (ころサポ)

### 【活動の概要】

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、困難な生活を強いられている本学学生に対して、池、永国寺両キャンパスから参集した10数名の教職員有志が、食品や日用品の配布(16件)、オンラインミーティングの開催(のべ15名が参加)などの支援を行った。活動は令和2年12月29日～令和3年1月3日の冬休み期間中毎日実施した他、今年度の医療福祉系の国家試験が「感染者は受験不可、再試験なし」という大変厳しい条件の中で実施されたため、令和3年2月にも追加で物資配布を行った。活動後に残った物資は令和3年3月に学生・就職支援課に引継ぎ、今後の学生支援に活用していただくこととして、本活動を終了した。

### 【背景】

COVID-19収束の兆しは依然みえず、今後も学生や教職員など単発の感染者発生は見込まれるが、これら大学関係者が起因する二次感染(クラスター)を防ぐことが、県立大学としての社会的責任と考えられる。大学から感染者や濃厚接触者に対しては具体的な支援があるが、発症前から感染性があること、無症状者が多いことを考慮すると、大学の機能が縮小する冬休み期間中に、大学による支援対象外の学生も含めて「目に見える形で」支援することにより、学生の不要不急の外出の頻度を減らし、結果的に感染拡大を防止できないかと考えた。

### 【活動趣旨】

1. COVID-19感染拡大の影響で、年末年始の帰省、飲み会、会食、バイトをあきらめて孤独に生活している本学学生を物心両面で元気づける。
2. COVID-19濃厚接触者、健康観察期間にあるものが外出することなく、安心して療養期間を完遂できるように支援する。
3. COVID-19感染拡大の影響で、困難になっている横のつながり、支え合う仕組みをつくる。

### 【活動総括(成果、意義)】

活動は単なる経済支援の域を超え、以下のような包括的效果があったと考えられる。

- ・自主的な判断で活動を制限している学生に対して、自粛生活を継続するための物心両面での具体的な支援を提供した。
- ・年末年始に学生が買い物等のために混雑する場所(スーパーマーケットなど)へ出かける機会を減らすことにより、感染拡大防止に一定の効果があった。
- ・日常生活制限の中で学生に新しい交流の場を提供した。
- ・すぐに支援を必要としない学生もリストに多数登録しており、大学冬季休業期間中の学生向けセーフティネットを補完した。
- ・COVID-19による日常の共同体の喪失が学生にもたらす影響の大きさ、精神的サポートの必要性が明らかになり、今後の大学教育支援のあり方に関する重要な示唆を得た。

### 3) 対外支援

12月25日に厚労省・文科省から看護系学部を有する各国公私立大学長に対し通達された、「新型コロナウイルス感染症対策における看護師等の免許を有する教員や大学院生の支援について（協力依頼）」については、日本看護系大学協議会からも協力要請があった。

高知県下でも12月中旬ごろより、多い日には1日20-30名の陽性者が報告され、療養場所の調整待機者は一時65名にのぼった。12月25日現在では、入院治療を要する者等183名、内医療機関103名、宿泊施設32名、調整中48名と療養場所の振り分けや宿泊施設での対応が佳境であった。同時に、PCR検査が陰性となり帰宅した人たちに対してもフォローアップを行う必要があり、医療機関もさることながら、公衆衛生部門の活動が多忙を極めていた。

そこで12月28日から地域看護学領域の教員を中心に、最も陽性者が集中しその対応に追われていた高知市保健所と、県下の感染対策を統括している高知県健康政策部健康長寿政策課に対しニーズ調査を行った。いずれも何とか年末年始の体制は整えているとのことであったため、1月に入ってから再度ニーズ調査を行い、応援派遣を行った。

#### (1) 高知市保健所

高知市保健所では12月の陽性者急増を受け、医療機関や宿泊療養施設への入院/入所調整や、施設からの退所者に対するフォローアップの業務を地域保健課が行っていた。しかし統括保健師の神崎氏によると、通常業務の傍らでもあり、他部署からの保健師応援を入れてはいるが、なかなか業務のマニュアル化や事後の整理が進まず、ケースごとの対応含め、全てを統括保健師が対応している状況とのことであった。

そこで学内から急遽、地域看護学領域の高橋真紀子助教に、令和3年1月13日（水）から2月5日（金）までの約3週間、高知市保健所地域保健課（高知市あんしんセンター1F）に応援に入っ

令和2年12月末頃の高知県下新規陽性者の状況

日	新規陽性者	合計	入院治療を要する者等		
			医療機関	宿泊療養施設	調整中
12月20日 (日)	23	173	98	22	53
12月21日 (月)	17	177	105	22	50
12月22日 (火)	31	190	112	20	58
12月23日 (水)	24	189	104	20	65
12月24日 (木)	19	191	108	26	57
12月25日 (金)	12	183	103	32	48
12月26日 (土)	14	161	93	36	32
12月27日 (日)	8	159	91	35	33
12月28日 (月)	8	158	86	41	31
12月29日 (火)	8	146	81	35	30
12月30日 (水)	12	138	74	35	29
12月31日 (木)	9	116	59	36	21
R3.1月1日 (金)	6	107	58	29	20
1月2日 (土)	7	95	58	26	11
1月3日 (日)	11	96	57	27	12

高知県健康対策課ホームページより抜粋

てもらふこととした。幸い高知市とは、平成 27 年 3 月 26 日より包括連携協定を締結しており、協定に基づいた出張派遣とすることができた。学内は 3 回生の領域別実習の時期であったが、実習は領域内の結束と寄付講座からの協力も得ながら、その他の学内用務は学部全体でカバーしながら対応した。

また感染症に対する保健師活動の応援である以上、用務によっては感染のリスクをはらむことも考えられる。身分は大学からの出張であったが、まずは感染者との直接接触はない用務からの開始であること、万一感染リスクが考えられる用務の場合は事前に事務方に連絡を入れ、補償が充分におこなわれるよう、派遣先、事務局と確認を行った。

高知市保健所では統括保健師の元では病院や施設からの帰宅者に対する電話フォローを行ったり、これまでの活動の集約、他部署からの応援者が一貫した活動ができるようマニュアル整備することなどを支援してきた。統括保健師の元で関連する用務の全体を見渡ししながら、体制整備の見直しなどについても参画し、体制の立て直しに貢献できたものとする。その甲斐あってか、引き続き市役所内他部署からの応援によって対応可能となった旨の回答があり、応援要請の継続はなかった。

活動については、3 月に行われた『看護を語る会』の中で報告してもらい、学部内で共有した。

## (2) 宿泊施設への応援派遣

県健康長寿政策課からは、高知市内の宿泊療養施設への看護師派遣について要請を受けた。看護師派遣は、基本高知県看護協会に依頼されており、ほぼ交代のローテーションができていたが、幾つか埋まっていない日があった。

宿泊療養施設での看護師用務は、電話（内線）で自己申告される体温や SpO2 による健康確認と、何かあれば別室待機の医師や県職員に連絡し、搬送を依頼するなどの内容である。PPE 着脱に不慣れな人でも着任できるようにと、基本的にゾーニングは緑ゾーンだけの勤務となっていた。謝金も出ることから、ある程度キャリアのあるフルタイムの大学院生に依頼することにした。条件としては、①電話の状況である程度身体状態が判断できる、②緊急時にも冷静にゾーニングを厳守しながら対応できる、③同居の家族がいれば家族の同意も得られる、④休職中の場合は所属機関の了承が得られる、⑤休職中の為謝金が受け取れない人はボランティアでの活動となることを了解している、などをあげ、主査・学部長・研究科長と相談して個々に意向を確認した。その結果、以下の通り延べ 5 名が応援に入ることができた（実働は 3 名）。

宿泊療養施設への大学院生の応援派遣

日	着任時間帯	人数
1 月 24 日（日）	17:00～翌 9:00 泊り	2 名（M1）
2 月 1 日（月）	17:00～21:00 準夜勤	1 名（M1）
2 月 7 日（日）	17:00～翌 9:00 泊り	1 名（M1）
2 月 21 日（日）	17:00～21:00 準夜勤	1 名（M2）

この宿泊療養施設のゾーニング対応は、自衛隊の感染症対策班の助言を得て設定されたものであり、大学院生にとっても、直接 COVID-19 陽性者と接する体験や、宿泊療養施設のゾーニング対応を直接体験する貴重な経験が得られたことと考える。